

国際シンポジウム 2023

”先住民遺産と研究倫理”

2023年1月20日（金）・21日（土）・22日（日）

【オンライン開催】Zoom ウェビナー配信

共 催

北海道大学 先住民・文化的多様性研究グローバルステーション（GSI）／アイヌ・先住民研究センター

協 力

公益社団法人 北海道アイヌ協会

プログラム

1月20日（金） 「シンポジウム基調講演・交流会」

- 18:20-18:30 開会の言葉 山内 太郎（北海道大学・教授）
- 18:30-19:15 基調講演 スタンレー・ウリヤジエック教授 オックスフォード大学
「栄養人類学について」
- 19:15-19:45 懇 談
- 19:45-19:50 閉会の言葉 加藤 博文（北海道大学・グローバルステーション長）

1月21日（土） 「先住民文化遺産と文化的景観」

- 09:00-09:05 開会のあいさつ/お知らせ
- 09:15-09:45 報告1 加藤 博文（北海道大学・教授／モデレーター）
「文化的景観と埋め込まれた記憶：沙流川保全対策事業から何を学ぶか」
- 09:45-10:45 報告2 長野 環氏・藤谷 直樹氏 平取町アイヌ施策推進課アイヌ文化保全対策室
「アイヌ文化環境保全対策事業 20年の歩み」
- 10:45-11:00 ~ 休 憩 ~
- 11:00-11:45 報告3 張 天新（北京大学・准教授）
「観光開発における文化的景観要素とその多文化的価値評価」
- 11:45-12:00 コメント ヨハン・エデルヘイム（北海道大学・教授）
- 12:00-13:00 ~ 昼 食 ~
- 13:00-13:45 報告4 トーマス・ソーントン（アラスカ大学・教授／国立科学財団）
「南東アラスカにおける先住民の文化的景観の概念化、表現、保全：宇宙の鳥、世界遺産、先住民のケアまで」
- 13:45-14:30 報告5 スヴェン・ハーカンソン（ワシントン大学・教授）

「文化財のコレクションで知識を取り戻す」

14:30-14:45 コメント ジェフリー・ゲーマン (北海道大学・教授)

14:45-15:00 ~ 休 憩 ~

15:00-15:45 報告6 中村 吉雄氏 千歳アイヌ協会会長

「千歳におけるアイヌ文化振興の取組み (仮題)」

15:45-17:00 総合討論

1月22日(日) 「研究倫理、先住民返還、先住民参画」

09:00-09:05 開会のあいさつ/お知らせ

09:15-10:00 報告1 ジョー・ワトキンス (北海道大学・教授/モデレーター)

「研究倫理と先住民の参加：私たちの考え方がどのようにコミュニティとの交流に影響するか」

10:00-10:45 報告2 カール=ヨスタ・オヤラ (北海道大学・准教授/ウプサラ大学)

「サーミにおける文化遺産の返還」

10:45-11:00 ~ 休 憩 ~

11:00-11:45 報告3 マイケル・ピッカリング (北海道大学・准教授/オーストラリア国立大学)

「オーストラリア・ファースト・ネーションの返還における経験と課題」

11:45-12:00 コメント 岡田 真弓 (北海道大学・准教授)

12:00-13:00 ~ 昼 食 ~

13:00-13:45 報告4 ジルダ・アンドリュース (オーストラリア国立大学・研究員)

「文化の継続性 - 博物館のコレクションを用いて現代の課題への取組み」

13:45-14:30 報告5 ジョシュ・スノッドグラス (オレゴン大学・教授)

「先住民族の健康調査における低侵襲バイオマーカー：機会と倫理的配慮」

14:30-14:45 コメント 辻 康夫 (北海道大学・教授)

14:45-15:00 ~ 休 憩 ~

15:00-17:00 総合討論

17:00-17:20 ネットワーキング シコポ・ニャンベ (北海道大学・助教)

“GSI E ジャーナルについて”

17:20-17:30 閉会の言葉 ジョー・ワトキンス (北海道大学・教授)

* 講演は全て日本語と英語の同時通訳が付きまます。質疑応答も日本語と英語の通訳を行います。

報告者紹介

1月20日(金)

基調講演 スタンレー・ウリヤジェック教授



オックスフォード大学教授で栄養人類学者。栄養学的健康の進化の基礎と文化的多様性を研究の中心としている。これには栄養不足と肥満の両方と、それらに関連する疾病を含む。これまでにインド、ネパール、サラワク、バングラデシュ、パプアニューギニア、クック諸島、ポーランド、イタリア、オーストラリアで研究を行ってきた。研究論文、編著書、著書などを幅広く発表している。肥満とそれに関連する要因に対する強い文化的・政策的な志向の、生物文化変動と肥満のためのユニット (www.oxfordobesity.org) のディレクターを務めている。

タイトル：栄養人類学について

要 旨：人間の適応性の最も基本的な側面は、生物環境から食物を得ること（栄養）と、他の生物に生きた栄養源として利用されないようにすること（感染症）である。本講演では、栄養人類学の観点から、この2つの要因について考察する。これは、過去及び現在における人間の食生活を、社会と集団の栄養健康との関連で考察するものである。人間は、進化の歴史、より最近のエピジェネティックな社会的過去、そして現在の社会的、文化的、生物学的なライフヒストリーの総体として考えられている。この下位区分学問分野の研究課題は、民俗学、歴史学、考古学から栄養学、疫学、解剖学に至るまでの多様な方法を必要とする。また、かなりの学際性が求められる。本発表では、人類の食生活の進化、食生活の柔軟性、現代の低栄養や感染症に関わる栄養人類学の側面に焦点を当てる。ここ数十年の間に大きな現象として現れた肥満。人間の病気との関係を変化させているものとして、現在の肥満の生態についても考察する。



1月21日(土)

報告者1 加藤博文教授（モデレーター）



北海道大学教授で先住民考古学と先住民文化遺産を専門とする。現在礼文島で国際フィールドスクールを主催する他、平取、弟子屈でアイヌコミュニティとの文化的景観の共同研究に取り組んでいる。北海道大学国際連携研究教育局先住民・文化的多様性研究グローバルステーション長、アイヌ・先住民研究センター長、ウプサラ大学考古学・古代史学部客員教授、オックスフォード大学考古学研究所アジア考古学・芸術・文化センター研究員、イルクーツク国立大学名誉教授を務める。

タイトル：文化的景観と埋め込まれた記憶：沙流川保全対策事業から何を学ぶか

要 旨：地理学者イーファー・トゥアン(1930-2022)は「風景には人々の集合的な経験が埋め込まれている」と述べている。一見、自然に見える風景にも、その土地の人々の記憶や歴史、物語が埋め込まれている。既存の伝統的な西洋の学問的知識で、先住民の文化遺産の多様な意義を引き出すことは容易なことではない。ここに、研究者と先住民の共同研究の可能性が見出される。また、このような研究は、地域コミュニティによって組織的に行われることが重要である。現地の声は非常に多様で、必ずしも一つの方向にまとまっているわけではない。この多様なコミュニティのニーズをどのように多面的にまとめていくかは、今後の研究者の課題である。本報告では、沙流川流域のアイヌ文化保全プロジェクトが提起した課題と今後の可能性を検討している。



報告者2 長野環氏、藤谷直樹氏 平取町アイヌ施策推進課アイヌ文化保全対策室

タイトル：アイヌ文化環境保全対策事業 20 年の歩み

要 旨：北海道沙流郡平取町には、沙流川総合開発事業として沙流川の下流域に「二風谷ダム」(1996 完成)、支川の額平川に「平取ダム」(2022 完成) 建設されました。

平取町には長年アイヌが生活の営みを繰り返してきました。ダム建設地周辺には、アイヌ文化にかかわる重要な場所がたくさんあり、そのなかにはダム建設によって水没したり、削られて地形が変わってしまう場所もありました。

国は、平取ダム建設計画にあたり、その予定地についてアイヌ文化環境保全対策を考慮するため、その調査を平取町に委託しました。

平取町は主として町内に居住するアイヌの人たちを中心としたメンバーに学識経験者数名を加えた調査委員会を設けました。

平取ダムの建設計画と並行して、アイヌ文化に関わる様々なものごとに対し、ダム建設が与える影響について、信仰や儀礼などの精神文化、生活文化や食文化、伝統的な農業、動植物や魚などの生き物の調査が行われ、2003 年から 2005 年の 3 年間に於いて総括報告書が作成され、その後も調査業務が続けられています。

併せて国と地元のアイヌの方々が平取ダム建設について長い期間をかけて慎重に議論を重ねながら平取ダムの建設が進められました。



報告者3 張天新博士



北京大学建築・景観学部准教授。研究テーマは、都市設計の方法論と理論、建築環境史、遺産保存、国立公園計画、観光計画など。研究および計画プロジェクトには、世界遺産である麗江古城に与える観光の影響、南溪江国家風景区のマスタープラン、福建省の観光計画などがある。

タイトル：観光開発における文化的景観要素とその多文化的価値評価

張天新¹ & 山村高淑²

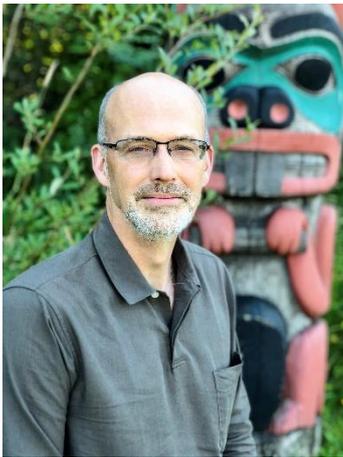
¹中国北京大学建築・景観学部准教授

²北海道大学観光学高等研究センター教授

要 旨：文化的景観は、先住民族や歴史的な場所とその周辺における観光開発において重要な要素である。本報告では鹿児島と沖縄のいくつかの島における特徴的な要素と観光的景観の構成構造を比較している。石垣、与那国、徳之島、奄美そして加計呂麻島を含んでいる。植物や動物、聖地、伝統的な経済製品、空間のシンボル、家屋といった自然や文化の要素を取り上げ、それらの周辺の国や地域とのつながりを例示している。それらは異なる時代における異なる文化の影響を反映した「影響スペクトル」を示している。この研究範囲は琉球弧にあたり、このような多文化的景観の概念は、島尾敏雄が提示したジャポネシア論と多くの点で共通するところがある。さらに、観光開発におけるその利用価値を分析。これらは、相互的に接続された文化のネットワークの中にこの地域を位置づけること、国際的な文化コミュニケーションにおいて重要な位置を占めていることを示すこと、そして地域のアイデンティティを高めることにおいて効果的である。そのため、現存する、あるいは潜在的な文化的景観を再評価し、保護するとともに、より大きな多層的な遺産観光の枠組みに統合することが重要である。



報告者 4 トーマス・ソーントン博士



現在、ワシントン DC にある全米科学・工学・医学アカデミーの環境変化と社会に関する委員会のディレクターであり、アラスカ大学沿岸熱帯雨林センターの環境と社会に関する客員研究教授を務めている。2008 年から 2018 年まで、オックスフォード大学の環境変化と管理プログラムを指揮し、現在は地理環境学部の名誉研究員を務めている。北太平洋とユーラシア大陸のコミュニティと 30 年以上にわたり連携してきた経験を持ち、主に環境人類学、人間生態学、環境変化と適応、文化遺産と天然資源管理問題についてこれまでに 100 以上の査読付き論文と 7 冊の本を出版している。近著に『Herring and People of North Pacific: Sustaining a Keystone Species (北太平洋のニシンと人々：要となる種を維持)』（マドンナ・モスとの共著、U Washington Press、2020 年）、『Routledge Handbook of Indigenous Environmental Knowledge (ラウトリッジハンドブック：先住民の環境に関する知識)』（ショニル・バグワットとの共編著、2021 年）がある。彼はクリンギット族のメンバーとして迎えられた。

タイトル：南東アラスカにおける先住民の文化的景観の概念化、表現、保全：宇宙の鳥、世界遺産、先住民のケアまで

要 旨：南東アラスカの先住民文化的景観の多くは、他の植民地時代と同様、誤った概念化、誤った表現、誤った保存という問題に直面している。文化遺産の保護や伝統的生態系知識の導入、文化資源管理への部族の参画を支援する先住民の権利や政策が認められてきているにも関わらずにだ。本発表では、筆者が過去数十年にわたり関わってきた、アラスカとカナダの国境や文化を超えた大規模な公園や（準）保護区に関するいくつかのケーススタディに触れる。また、重要な先住民の文化的景観に対する従来の誤読を理解し、それに対応するために歴史的生態学、民族生態学、政治的生態学の理論的・分析的枠組みを用いる。



報告者 5 スヴェン・ハーカソン博士



自身が生まれ育ったアラスカのスグピアック族の伝統をはじめ、先住民文化の記録、保存、復興におけるリーダー的存在である。マッカーサー・フェロウシップ（2007 年）、ATALM（トライバルアーカイブス、ライブラリー、ミュージアム協会）ガーディアン・オブ・カルチャー・アンド・ライフウェイ・アワードを受賞し、アングヤク（ボート）の研究によりアラスカ・イノベーター・ホール・オブ・フェイムの殿堂入りを果たす（2020 年）。2000 年から 2013 年までアルテイク博物館のエグゼクティブ・ディレクターを務め、2013 年にはワシントン大学の人類学准教授およびバーク博物館のネイティブアメリカン・コレクション担当学芸員に着任し、現在は人類学講座の講座長を務める。バーク博物館の「文化は生きている」新ギャラリー（2016-19 年）の設計で中心的な役割を果たした。

タイトル：文化財のコレクションで知識を取り戻す

要 旨：過去数世紀にわたり、観光客は出会った人々の文化的なものを収集してきた。交換する贈り物、材料との交換、異国人のコレクションとして始まったものもあれば、人々の支配によって奪われ、盗まれたものがある。文化的な作品は、決して静的なものではなく、過去に持ち出されたコミュニティの中で今再現されつつある文化遺産と知識の具体的な歴史を表している。この 30 年間にわたり、私のコディアック島の部族であるスグピアック族とともに、かつて消滅したと思われていた知識を再び結びつけ、研究し、学び、そして今、生きた文脈で称賛するというプロセスに携わってきました。世界がよりグローバルな意識を持つようになるにつれ、これらの

コレクションは、誰もかつて考えもつかなかったような方法で、地域社会に再び受け入れられている。フランスやロシアにしか存在しないと思われていたスギアットマスクのコレクションから、私たちの生活から姿を消していた無甲板船アングヤークまで。私は、若者たちがもう一度これらを讀え、使うことができるように、この知識を再活用することに取り組んできた。この2つは、今、世界中の先住民族が再び目覚め、称賛している多くの文化的なものの一例に過ぎません。



報告者 6 **中村 吉雄氏** 千歳アイヌ協会会長

タイトル：千歳におけるアイヌ文化振興の取組み（仮題）



コメント **ヨハン・エデルハイム教授 PhD (文化学)**



北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院メディア・コミュニケーション研究院観光学とメディア教授。ホスピタリティ・ツーリズム業界で10年以上グローバルに活躍後、中等・高等教育機関の教育者となる。教育学、哲学、文化研究、ホスピタリティ、ビジネスなどの学位を持つエーデルハイム教授の研究の背景には、人間や人間以上の他者（モア・ザン・ヒューマン・アザーズ）を大切にしたいという思いが深く根ざしています。

研究テーマは以下の通り：

- a) 観光高等教育に関連した教授・学習の学識 (SoTL)
- b) 気候変動、平等、アイデンティティ、エスニシティ、ケアに関連するクリティカル

ルツーリズム論 (CTS)

- c) 観光とホスピタリティの基礎となる哲学（特に存在論と公理論）
- d) 動物関連観光（コンパニオンアニマルに焦点をあてる）



コメント **ジェフリー (ジェフ) ・ゲーマン教授 PhD (教育)**



北海道大学大学院教育学研究院・北海道大学メディア・コミュニケーション研究院専任教授。研究専門分野は先住民族教育、教育人類学。国籍はアメリカで、30年以上日本に滞在し、そのうち約20年間はアイヌ民族の支援に携わっている。最近の著書には「アイヌの教育とエスニシティ」(マイケル・ワイナー編著『Routledge Handbook of Race and Ethnicity in Asia』ラウトレッジ出版、2021年)、「国際先住民族教育運動に見られるアラスカ・ネイティブの教育的戦略」(佐藤千津編著『コミュニティの創造と国際教育』赤石出版、2021年)などがある。



1月22日(日)

報告者1 ジョー・ワトキンス教授 (モデレーター)



オクラホマ州のチョクトー族出身でアリゾナ州ツーソンの Archaeological and Cultural Education (ACE) Consultants, LLC のシニアコンサルタント。北海道大学先住民・文化的多様性研究グローバルステーション及び、アリゾナ大学人類学部の教授である。人類学の倫理性と、アメリカやオーストラリア、ニュージーランド、そしてここ日本における子孫コミュニティとの関係性研究を向上させる著書で国際的に知られている。2019年から2021年にアメリカ考古学会の会長を務めた。

タイトル: 研究倫理と先住民の参加：私たちの考え方がどのようにコミュニティとの交流に影響するか

要 旨: 人類学の研究者として、私たちは先住民族やそれ以外のコミュニティとの関わり方について、倫理規範を作ることに苦闘している。倫理規範が私たちの先住民コミュニティとの関わり方にどのような影響を与えるのだろうか。私たちの先住民コミュニティとの関わりがどのように倫理規範に影響を与えるのだろうか。倫理規範は、人類学以外のコミュニティからどの程度影響を受けるべきなのか？ それとも私たちの規範は私たちが働きかけている文化の当事者のことを考えるというよりは、考えずに研究を行う者たちにとっての「ベスト・プラクティス」を提供するために作られた単なる文書である方が良いのだろうか。この論文では、北米の様々な人類学会の倫理規定の歴史を簡単に紹介。その後、現在の規範の発展へ導いたものをいくつか紹介。続いて、これらの規範が時代とともに様々なコミュニティの関与をどのように考えていたかを説明。最後に人類学的研究において、先住民コミュニティの参加を阻むいくつかの障害について議論する。



報告者2 カール=ヨスタ・オヤラ博士



ウプサラ大学(スウェーデン)の考古学上級講師兼北海道大学国際連携研究教育局の准教授。主な研究テーマは、北フェノスカンジアの考古学と遺産、サーミの考古学と遺産管理、考古学の政治、そして文化的権利と先住民性、脱植民地化、先住民返還と再埋葬に関する議論などである。

複数の研究に携わり、北欧諸国とロシアにおける北方考古学の研究史的視点やサーミの土地における植民地史と関係、サーミの物質文化の近世の収集、19世紀から20世紀初頭のサーミの祖先の遺骨収集、さらに現在の文化復興と脱植民地化運動、サーミの土地における先住民返還と再埋葬のプロセスを調査している。

タイトル: サーミの土地(ラップランド)における争われた植民地時代の歴史と遺産：植民地収集、先住民返還、遺産管理

要 旨: 近年、サーミの土地における北欧植民地主義の歴史と遺産は、研究者によってますます議論されるようになってきた。その為植民地の過去と昔についての一般の意識も高まってきている。サーミの土地における北欧植民地主義をより広範に検証する必要性から、植民地収集の歴史と遺産を認識し、批判的に検証する必要がある。これらの歴史には、例えば、17世紀から18世紀にかけて没収・収集されたサーミの神聖な太鼓などサーミの物質文化の収集や、19世紀から20世紀初頭にかけて北欧諸国における人種科学や頭蓋学コレクションの収集の一環として行われたサーミの人骨の収集が含まれる。

同時に、サーミの個人、グループ、組織は、遺産問題における自己決定の拡大とサーミ文化の権利の尊重を要求しており、これには先住民返還と再埋葬の要求も含まれている。

本稿では、過去と現在の緊張関係にあるこの分野において、研究機関や遺産管理機関が直面するいくつかの課題について考察する。この論文は、北欧諸国における先住民返還と再埋葬のプロセスに関する現状と、そのより広い意味合いと重要性を取り上げ、考古学と遺産管理における政治、倫理、権力の力学を検証することの重要性を強調するものである。



報告者3 マイケル・ピッカリング博士



オーストラリアのファースト・ネーションの遺産の研究者で、これまでにオーストラリア全土のアボリジニおよびトレス海峡諸島民の組織、遺産管理機関、博物館と幅広く連携してきた。2001年から2022年まで、オーストラリア国立博物館にて、レパトリエーションとファースト・ネーションの遺産に焦点を当て研究を行った。オーストラリア国立大学遺産・博物館学科名誉准教授で北海道大学先住民文化的多様性研究グローバルステーションの准教授、そしてドイツ・ケルン大学オーストラリア研究センターのパートナーである。研究の関心事は多岐にわたり物質文化、カニバリズム、居住形態、博物館展示、博物館倫理、レパトリエーションなどのテーマで論文を発表している。

タイトル：オーストラリア・ファースト・ネーションの返還における経験と問題

点

要 旨：本報告ではまずオーストラリアにおけるレパトリエーションにフォーカスしたファースト・ネーションの歴史の概要を紹介。その後30年にわたるレパトリエーション活動で生じた研究倫理や先住民の参加と先住民のレパトリエーションに関する問題を考える。

オーストラリアの公立博物館や政府機関は、先祖代々の遺骨や秘蔵品、時には世俗的な資料の返還に長い間取り組んできた。多くの実用的なアプローチが試され、洗練されてきた。それにもかかわらず、このプロセスでは、ガバナンスや倫理、「博物館の脱植民地化」の議論の分野ほどではないが、実践の分野で特定の対立が発生してきた。レパトリエーションの理論や哲学に関連する領域が、一般的なメディアや学術的なメディアで詳細に議論されるようになったのは、比較的最近のことである。オーストラリアの経験と対応は国内外の制度的実践への情報提供に役立つ。オーストラリアのファースト・ネーションの人々との密接な関わりは、他の国際的な先住民族のコミュニティにも直接参考になる貴重なケーススタディとなる。



報告者4 ジルダ・アンドリュース博士



キャンベラ在住のオーストラリア先住民の文化実践者であり、博物館民族誌学者。自身が受け継いだものをもとに、土地、物語、文化と博物館収蔵品との関連性を調査している。物質文化とそれにまつわる物語に焦点を当て、カストディアンシップの定義を、モノの保存に焦点を当てたものから、モノとそれを生み出すシステムとのつながりを維持しようとするものへと押し広げ続けている。

タイトル：文化の継続性 – 博物館のコレクションを用いて現代の課題への取り組み

要 旨：オーストラリア先住民にとって、国内の博物館のコレクションは、私たちの過去の文化的資料の膨大な宝庫である。これらのコレクションは西洋の学問的発想や探求の過程で収集されたもので、その性質上議論的にある。また、私たちの植民地化の歴史と経験、植民地化より前のライフスタイルや慣習を明らかにするためにますます使われるようになっている。本論文では私たちがこれらのコレクションを新しく協力的な方法で活用し、現在の大きな課題に取り組み、先住民族の哲学や思想を特徴とし尊重するもっと強い未来へ私たちを導くいくつかの方法を探る。



報告者 5 ジョシュ・スノッドグラス教授



オレゴン大学人類学及び国際保健学部教授でヒューマン・バイオロジー学会の会長を務める。2007年以降の世界的な老化と成人の健康に関する研究（SAGE）の実施など、世界保健機関（WHO）と幅広く協力している。また、グローバルヘルスバイオマーカー研究所の共同所長、シュアール・ヘルス&ライフヒストリープロジェクトの共同ディレクターを務めている。社会的・環境的要因が健康に及ぼす影響、低侵襲性技術を用いて得られる生理・健康のバイオマーカー、人類の食生活の進化などを研究の中心としている。

タイトル：先住民の健康調査における低侵襲バイオマーカー：機会と倫理的配慮

要 旨：バイオマーカーは健康状態、生理的反応、環境暴露、および/または疾患感受性を示す指標で社会的・環境的要因がどのように生理機能や健康をつくるかを調べるため、また、医療サービスが行き届いていない地域の人々の健康に関する疫学データや医療情報を提供するために、ヒューマン・バイオロジーや関連分野で幅広く利用されている。地理的、経済的、政治的、社会歴史的な多くの要因により、医療サービスにおける格差が顕著で、疾病負担が不均衡に高い先住民族との協働においては特に、ポイントオブケア検査による指刺し採血など、低侵襲性技術の開発が貴重なものとなっている。本論文では、先住民族グループの人口に基づく研究における低侵襲なバイオマーカーの利用について見直す。続いて、「シュアール・ヘルス&ライフヒストリープロジェクト」（エクアドル・アマゾン地域）と「シベリア先住民族の健康・適応プロジェクト」（ロシア・サハ共和国）における、コミュニティを基盤とした共同研究を見ながら、私たちがどのようにコミュニティと提携し、彼らがプロジェクトからどのような利益を得たかを考察する。私たちは、次の4点について研究者が果たす責任を含め、重要な倫理的配慮に光をあてる。1) コミュニティの保護と尊重、2) 医療情報の保護、3) 長期的なコミュニティ構造への投資と健康改善への道筋を示す、4) データ主権に関する複雑な問題への対処。



コメント 岡田真弓准教授

北海道大学アイヌ共生推進本部及び観光学高等研究センター准教授。



コメント 辻康夫教授



北海道大学法学部教授（法学研究科附属・高等法政教育研究センター長）
専門は政治理論で、多文化や先住民の問題に取り組んでいる。様々な理論を日本の文脈にどう適用していくかを考えている。



ネットワーキング シコポ・ニャンベ博士



北海道大学アイヌ・先住民研究センター及び先住民・文化的多様性研究グローバルステーション(GSI)所属の助教。GSIでは近日創刊予定の電子ジャーナル「Indigenous Studies and Cultural Diversity（先住民研究と文化的多様性）」の編集管理を担当している。
大学では教育学（心理学とフランス語）を専攻。児童青年心理学修士号、健康科学における博士号を取得。研究は学際的研究を向上させ、多様な人々や社会と関わるための手段としての参加型アクションリサーチや参加型リサーチ方法論に焦点を当てて行っている。

本シンポジウムにおいて電子ジャーナル「Indigenous Studies and Cultural Diversity」について紹介する。

同時通訳機器貸し出しについて

同時通訳機器の貸出は会場入り口で行っております。お帰りの際はご返却をお願いいたします。

**本研究は、独立行政法人日本学術振興会の「研究拠点形成事業」（課題番号：PG7E210001）及び科研費21H04352202の助成を受けたものです。